花開くとき

鈴蘭

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
花開くとき

【Ｎコード】
Ｎ２１２１Ｚ

【作者名】
鈴蘭

【あらすじ】
彼と両思いだと思ってた…
でも…通り魔事件によって変わった。
彼の心はどこ？私の心はどこ？
私の心は…花。
でも…花は散ってしまった…

第一章

花…それははかないもの…。

散ってしまえば、その花は終わってしまう。

そう、恋も同じ。

恋という花が散った時、失恋という悲しさが、私たちを襲う…

―――花開くとき―――

私の名前は宮野志保。
科学免許、医者免許を持っている、天才博士と言われている私。
そんなの、ただの空論にしか過ぎない。
まぁ、免許を持っているのは本当。
でも、天才なんて…この世にいない…と思う。

最近、「と思う」が多くなってきた。
しかも、天才だとか、すごいとか…。

そう、私から見て、天才、すごいが当てはまっている人がいる。
ただの憧れじゃない。
私の好きな人なのだ。

彼は、私をいつもいつも助けてくれた。
私が灰原哀だったとき、私を守ってくれた。
いつもいつも守られていた私。
だから、彼にひかれていった。

どうして？
どうして私を守るの？
期待させるようなこと…しないでほしい。
私はあなたを愛してしまった。
罪なことをしてしまった。
でも、これは、チャンスかもしれない。
もし、あなたが私のことを愛しているなら、
私と両想いならば、私は幸せになる。

だって…そうでしょう？

好きでもない奴を守る？
好きでもない奴を助ける？

私だったらそんなことしない。

でも…私は本当に罪びとである。

彼をずっと待ち続けていた、蘭さんから取ってしまうこと。

きっと私と彼は両想い。
でも…蘭さんの幸せはどこ？
蘭さんはずっと暗闇にいることになる。
彼という希望を私がとってしまったら…。

あほらしい。

そんななの、蘭さんは強いから平気よ。

彼がいなくたって、彼女はきっといい人(彼氏)を見つける。

そうでしょう？蘭さん。

「新一ぃ！」

あら、蘭さん。
私の彼氏に手を出すなんて…。

「なんだぁ～蘭！！」

あらら、どうしてこたえるのよ！

「今日、買い物に付き合ってくれる？」
「あぁ、いいぜ！」
「よかったぁ！最近通り魔が多いからさ…！」
「あぁ…蘭、気をつけろよ？その犯人、そっと目的（ターゲット）に忍び寄り、気付かれぬままナイフを女性の腹を突き刺すんだってさ。」
「しかも、女性ばかり。いやだなぁ…」
どうして？
どうして蘭さんの心配ばかり…

私の好きな人、それは工藤新一。
名探偵の工藤新一。
優しい工藤新一。
私のもの…。
彼は…私のもの。

「志保さん！」
「あら、蘭さん。」
「今日、買い物行かない？」
「行かない？って…あなた知ってるでしょ？通り魔のこと。私はそんな危険なこと…」

ちょっと待って。
もし狙われるとすると、きっと工藤君が助けてくれるはず…！
「いいえ、行くわ！あなたが狙われたらいけないものね！」
調子よく言った私。
うふふ…
「じゃぁ、放課後！！」

蘭さんの声とともに、チャイムが鳴る。

授業中はいつも寝ている彼。

私も眠い…。

あ…もう限界…。

「…さん！？」

え…？

誰…？

「…ほさん！？？」

誰よ…

「・・・ほさん！？」

誰なのよ…あなた…！！

いやぁぁぁ…！！

「志保さん！！！！！」

ハッと我に帰った時、私は放課後の教室にいた。
教室にいるのは私と、蘭さんと…工藤君だった。
私を待っててくれたのね…。
「蘭さん、行きましょう？」
蘭さんの手を引くとともに、工藤君に視線を向ける。
あ、こっちを見てる…。
いいえ…あれは私に見ているんじゃない！！

蘭さんを見ていた・・・。

優しい、穏やかな笑顔で…

第二章

「蘭！蘭っ！！！！蘭っ！！！！」
「ら・・・ん…さん…」

ピーポーピーポー
「お前を逮捕する！！」

男女の大声が道路に血まみれで横たわっている女子に呼びかけている。

その女子は帝丹高校二年、毛利蘭だった。

呼びかけている女は驚きで何も言えない…。
男は一生懸命汗を流すまで大きな声で呼びかけた。

「誰かー、付き添ってくれる人はいませんかぁ！？」
救急車の人が人々に呼びかけている。
蘭を救急車に乗せた。
「俺、行きます！」
「わかりました、では、乗ってください。」
新一は素早く乗ると、研究者、医者の宮野志保は救急車が出発するのを見届けた。

なぜ…
蘭がこうなってしまったのか…
それは、今から３２分１５秒前…

ここから、志保目線で説明します…。

「えーと…これと…これと…」

蘭さんが傷のなさそうな野菜を一生懸命選んでいる。
どうやら今夜はカレーらしい。
しかも、三人分取っている…。
蘭さんと、蘭さんのお父さんということはわかるけど…
あともう一人は誰かしら？

「新一、サラダ食べる？」
さっきから蘭さんは工藤君に質問。
私はそんな景色を見て、こう推理した。

あともう一人は…

工藤君だと…。

工藤君は嬉しそうに答えている。

きっとそう。

私という人がいるのに…。

どうして…？どうしてなの？

「蘭さん、私、外に出てるわね。」
「え…志保さん、どうかした？」
「ちょっと気分が悪くて。それじゃぁ、待ってるわ。」
「う、うん…」

私はスーパーのそばにある、公園のベンチに座っていた。

ぼんやり空を見ていると、雲の影から、月が私を照らした。
こんな月、工藤君と見られたらいいのに…。
ロマンチックなのに…

「キャァァーーーーッ」

ハッ…
何？今の悲鳴…！！

私はあたりを見回す…
そこにいたのは、腕を抑えた、ポニーテールの３０歳ぐらいの女性と、その場を逃げ去る、犯人らしき人が血まみれの果物ナイフを持ってこっちへ向かってくる…！！

「はぁぁ…！！どけ、その女（アマ）！！！」
「い…イヤァァァァァァァァ！！！！」

私が悲鳴を上げた・・・
目をつぶって痛みを感じ…
てない…？

今…ナイフが突き刺さった音がしたはず…！！
「ヒャヒャヒャヒャヒャヒャッ」
犯人だって…笑ってるじゃない…！！
私…死んでるの？
そっとそっと目を開けた・・・。
そこにいるのは…黒髪で私が憎んでいた…
蘭さんだった…。

「ラ、蘭さん…！？」
「だい・・・じょうぶ？けが…ない？」
そ、そんなことより…あなたのほうが…っ！！
蘭さんのおなかから大量に血が出ていた。
「だいじょう…ぶ…警察…呼んだから…」
「救急車、呼んでくるわ！」
私はその場から逃げたかった。
私のせいにされる…
工藤君に文句言われる…
私が戻ってくると工藤君が蘭を抱き上げていた。
哀しそうな、憎しみのこもった顔で私を睨みつける・・・。
「く、工藤君・・？」
「宮野…救急車は？」

「あ、あと1分ぐらいで…」
「そうか…っ蘭っ！！！しっかりしろよ！蘭！！！」
さっきより血が…たくさん出てる…！
「ら・・・ん・・・さん・・・」
どうにもならなかった。
どうにも…

救急車がくると、蘭さんはタンカに乗せられ、工藤君は付き添っていった。
私はただ…見守るしかなかった。
哀しい顔をしていることは…私にもわかった。
そのご、蘭さんを襲った通り魔は無事、逮捕された。

「蘭さん…」
そっと呟いた時、私の目から涙が出てきた…。
その時、どこからか、声が聞こえてきた。

「あのひとよ、あの人。さっきのかわいい子がかばったのよ…！お礼も言わないで…っもしかしたら、さっきのかわいい子をたてにし

たんじゃない！？」
「最低ー！」
「本当よね！？」

違うのに…蘭さんが勝手に…
でも…お礼も何も言ってない…。

蘭さん…っ
蘭さん…っ

ゴメンナサイ・・・

そして…

ありがとう…

私は急いで米花総合病院に向かった…

第二章（後書き）

蘭…どうなるの！？

第三章（前書き）

蘭目線です！

第三章

私…どこにいるんだろう…？

真っ暗な世界…

暗黒な世界…

そんな感じがする。

真っ暗で何も見えない…！

怖い…いや…

私…何があったんだろう？

確か…確か…

私…志保さんをかばって…かばって…

そう…通り魔に刺されちゃったんだ…

ちょうど買い物が終わったから公園に行ったら、志保さんが襲われそうになっていたから…なぜか、体が動いていた。

そのあとのことは覚えていない…。

かすかに新一の声が聞こえた。

一生懸命私を呼んでくれた。それだけでうれしかった…新一が私を呼んでくれているだけでうれしいよ…。

もし…私が死んじゃったら…志保さんと幸せになってね…新一…。

そう、知ってた…志保さんは新一のことが好きだって。

きっと新一も志保さんが好き。
でも・・私は新一がずっと好きだった…。
その時、志保さんが通り魔に襲われそうになっていた…。
志保さんが死んでしまったら、新一の幸せはどこへ行くの？
そう思ったとたん、私は志保さんを庇っていた。新一の幸せのため、
志保さんの幸せのため、そして、私の幸せのため。
新一が幸せなら…私も十分に幸せです…。

新一……

ハッ・・・

聞こえた…蘭の声が聞こえた…！

俺は、蘭を助けてやることができなかった。
蘭と幼馴染の俺が…
蘭を昔から愛している俺は…守ることができなかった。
蘭を守ることができなかった。
まさにスローモーションだった。
でも、そのスローモーションに俺はついていくことができなかった。
蘭は命を張って宮野を守った。
俺は…そんなことできなかった。
どうしてだ？
探偵であるこの俺が…一人の女の子に負けるなんて…

そんなのどうでもいい！
とにかく…蘭が助かるまで…
俺は…戦い続ける…！

志保さんと幸せになってね…

え…？

蘭…？

何言ってんだよ…！俺は…蘭が好きなんだぞ？！

蘭…！！

まさか…

俺は急いで蘭のいる病室へ向かった。

「蘭！蘭！！」

一生懸命呼びかける。
付添いの宮野が驚いたような顔をしている。

「工藤君！何を…！！」
「蘭！！蘭っ！！！！」
「工藤君！」
宮野の声なんか俺の耳には届いていなかった。
それよりも、蘭の言葉が聞きたくて…蘭の瞳が見たくて…たまらなかった。

あ…動いた…

蘭の指がかすかに動いたのが、おれも、宮野も分かった。

「蘭！？蘭！！！」

「…」

蘭の瞳がかすかに見えた…。
きれいなすんだ瞳が俺に見えた…。
きれいに丸く開いた瞳は…どこかわからないようなどこか、遠くを見ているような目だった。
「宮野！先生を呼んで来い！」
「ええ！！」
宮野が走っていく。
「蘭！目が覚めたんだな！」
「…」
「蘭…？どうかしたか…？」
蘭の返事がない…。
蘭の返事が…ない…

どうかしたのか？
蘭…？

「あなたは誰…？私は…蘭っていうんですか…？」

第三章（後書き）

蘭！？どうかしたのかぁぁぁ！！？
→ってオーバーな私です…！
感想待ってます！

第四章

「あなたは誰…？私は…蘭っていうんですか…？」

衝撃の言葉が、工藤君に襲いかかる。
私がそれを聞いたのが、先生を病室に急いで連れてきて、ドアを開けた瞬間だった。

「ら・・・ん？」
工藤君はもう失神寸前のような目で蘭さんを見つめていた。

「あの…だから…！私は…？」
蘭さんは…

記憶喪失になっていた…

なぜ…？なぜ？

どうして…！？
私をかばったことがそんなにショックだったの？
私…私がいけないの？

蘭さん…！何とか言ってよぉ…！！！

「毛利さんのご両親は？」
先生が工藤君に話しかける。
でも、私が答えた。
今の彼に、どんな声をかけたって彼の耳には届きはしない。
たとえ私でも…蘭さんでない限り…

「今日、来るはずです…！」
「そうか…宮野…さん、ちょっと別室に来てください。」
「わかりました。」
蘭さんのことで、先生とよく話した。

「それで？蘭さんはどうなったの？」
「あなたも医者でしょう？わかるはずです。」
「いいから答えなさい！！！蘭さんは…！どうなってしまうの！？」

「…記憶…喪失です…」

「記憶…喪失…」

心の中ではもしかしたらと思っていた…

でも…本当にそうとは思わなかった。

私は重い足で、工藤君を呼びに行った。
「工藤…」
工藤君と言おうとしたとき、工藤君は蘭さんを抱きしめていた。
蘭さんは驚いたような顔つきで工藤君を見ていた。
見てはいけないようなものを見てしまった。

「あ…あの・・・？」
「あら…やだ…工藤君？何を…」
「蘭…」
私の声が届いていない…
彼の耳には蘭さんの声しか届いていない…

「あ、あの…だから…私は誰なんですか？あなたはいったい誰なんですか？」

「…蘭…！本当に何も覚えていないの…か？」

「わかりません…」

「そ・・・か…」
工藤君は非常に残念そうに言う…。
「工藤君…よく聞いて…今からいうことはすごく傷つくかもしれな

い…！」
「知ってる…蘭は…記憶喪失なんだろ？」
「…そうよ…しかも…もしかしたら、もうこのまま記憶喪失のままになってしまうかも…知れないの…！」
「…！！！！！」
私の言葉に工藤君は目を見開き、驚いた様子だった。

「蘭さんが元に戻る可能性は…１１％…」

たった１１％の確率…
いくら蘭さんだって…どうなるかわからない…！

「蘭さん…あなたの名前は毛利蘭と言って…」
「蘭…毛利蘭…」
「そう…空手を習っていたわ…。すごくカッコよくて、関東大会、東日本大会で高校二年の部に優勝したわ…！」
「東日本大会…優勝…？」
「そう…蘭さんはすごくうれしがっていたわ…」
「…本当？」
「えぇ！」
「そう…」
どこか悲しげの蘭さん…そんな思い出をなくしてしまったことが…彼女を苦しめているのね…
「あなたに抱き着いた変態のこの人が、工藤新一…」
「工藤…新一…？」
ピクン

あ…蘭さんがかすかに揺れる…
「覚えがあるの！？」
「いいえ…でも…すごく暖かい感じがするの…でも…でも…何かさびしい。私…あなたの気持ちがわかる…」
「え…？何を言ってるの？」
「名前は…？」
「宮野…志保よ？」
「宮野さん…ちょっと…」
蘭さんに惹かれて、病院の隅で、蘭さんが話した。
「あなたは…その…工藤さんが好きなのね…」
「…」
「私、わかった。私は、記憶喪失になる前に、工藤さんが好きだったのね…でも…あなたたちがいたから、わたしはあきらめたのだと思うわ…それから…覚えが…」
そういったとたん、蘭さんは倒れてしまった。
「蘭さん！！！」

私は急いで軽い彼女を抱いて病室へと連れて行った。
工藤君はもう、病室にはいなかった。

先生が蘭さんを見てくださっている。
私はその時、工藤君を探していた。不意に、夕日がきれいになる土手を見てみた。
そこには、私の愛しい彼がいた…。
「工藤君…」
私は静かに彼の横に座った。
彼はぼんやり空を見ていた…。そんな彼がかわいそうに思えた…
「工藤君…」
もう一度呼びかける…。
応答は…ない。

仕方ない…。
それなら…告白してしまおう…
これで…彼の傷を…癒してあげたい…

「工藤君、私、あなたのことが好きよ？」
「…？」
ピクン
私のほうを見る…。

「好き…あなたが好き…！この気持ちは…蘭さんより強いわ…ねえ…工藤君…私と付き合って…そうしたら…蘭さんという傷から…抜け出せるわ！！」

「宮野…俺…」

第四章（後書き）

どうこたえるか、新一君！！

第五章

「宮野…俺…

無理…だ…」

やっぱり…ね…

でも…やっぱり悲しいわ…。

本当に口から伝えられるのはね…

ねぇ…最後だけ…最後だけ…

最後だけわがままいいかな…？

私はそっと…そっと彼にやさしく抱きついた…。

きっとあなたは驚いたことでしょう…でも…

最後のわがままだから…お願い…！

私を包んで…お願い…

「宮野…」

「お願い…っ！私を抱いて…！！私…の…最後の…最後のわがままだからぁ…！！」

私は涙が止まらなかった。

そして…彼は優しく私を抱いてくれた…。

あたたかいあなたのむね・・・。

大好きだったあなたの胸…。

今でも…この先も…あなたを愛しています…

私は静かに離れると、「だいすき」と耳打ちしながら家に帰って行った。

蘭さん、ごめんなさいね…私、彼をもらうわ…。

あなたには…まけやしない！！

「蘭さん…私…」

誓うわ…あなたを超えて見せる…！
あなたから…工藤君を取って見せる…

その時だった。私の考えに…何かが横ぎった…。

何…？なんだろう…！？

トゥルルルル
トゥルルルル

私は急いで受話器を取った。
「はい、阿笠または宮野です。」
「俺だ、工藤。」

「あら…どうかした？」
私…胸が熱く…
「蘭の声が聞こえたんだ…」
「え…？」
「宮野と幸せになってくれって…」
「…？ちょっと…それって…」
「もしかしたら…蘭は自分から記憶喪失になったんじゃないか？演技していない、本当にそう思ったから…蘭は自分を捨てたんじゃないか？」
「…そうよ…蘭さんは…あなたが好きだったのよ…！大好きだったから…」
「…俺も…好きさ…蘭のこと…愛してる…」
「…！！！」
聞きたくない…！ききたくない！！
蘭さん…！蘭さんの…バカァァァァァァァァ
「あなたたち両想いだったのね…」
「あぁ・・・そうみたいだな…」
うれしそうな声して…
蘭さん…私…あなたに悪いこと思ってたみたいね…。

蘭さん、確かに私は彼のこと好きよ？
でも…
私はもういいの。
蘭さん…あなたに譲るわ…。
私は…あなたたちを見守るわね…。
頑張って…蘭さん…！

Farewell, my first love.

Snichi did not love.

第五章（後書き）

最後のは、新一、大好きでした。
さようなら、私の初恋。
です！
最後だけ、新一と呼び捨てにさせたこと、新蘭ファン、ごめんなさい！
感想お待ちしています！

第六章

蘭さんが記憶喪失になって、はや一か月が好きた。
相変わらず工藤君は蘭さんにつきっきり。
蘭さんは、工藤君と一緒にいるときだけ、笑顔を見せる。
最近渡しといても笑顔を見るようになった。
特に、園子さんなんか、ケラケラ笑っている。

「蘭さん、最近明るくなったわね。」
「せやね！蘭ちゃん、明るくなってほんまうれしいわぁ…」
和葉さんがホット胸をなでおろす。
私もなでおろしたい気持である。

「蘭ちゃーん！！今日、ショッピングいかへん！？」
「うん！行く！」
蘭さんは以前よりもすごく明るくなっていた。
私は、それだけでうれしかった。
蘭さん…蘭さん…蘭さん…
あぁ…蘭さん…あなたはすべてを失ってしまったのね…
愛も、友情も…

「これ、いいわね…」
「蘭ちゃん、これええんと…」
和葉さんの声が止まった。
「和葉さん？」
「お、おらん…」
「え…？」
「おらんのや…蘭ちゃんがおらへんで！？」
「…！？」
蘭さんが…いなくなった…！？
ありえないわ…
蘭さんなら、記憶喪失になっている人間がどこかへ行ってしまうなんて…！！
連れ去られた…！？
ゆ、誘拐！？

「和葉さん！すぐに、工藤くんや、大阪の少年に連絡しましょう！」
「うん！」
二人は急いで探偵たちのもとへ走って行った。
すぐそばに老人と蘭がいるとは知らないで…

第七章

蘭は和葉と志保が行くのを見ると、老人とともに、また、どこかへ行ってしまった。
「ねぇ、博士。本当？」
「そうじゃ、おぬしの記憶はすぐ戻る。」
「阿笠博士って、本当にすごいね…」
「そうか？」
「工藤さんが言ってた。博士はガラクタばっかり作ってるって。でも、私はそう思いません。」
「よかった…！」
二人はこんな会話をしていた。
その後、阿笠邸で阿笠博士、ご自慢の「記憶喪失元に戻しマシーン」を蘭に見せた。
「博士、私、博士のことあんまり知らないけど、ありがとう！！」
「そんじゃ、このヘルメットを、かぶって。」
「うん…」
蘭はヘルメットをかぶると、少し悲しげな様子で博士を見つめた。
「どうした？」
「わからないの…」
「へ？
「本当に戻っていいのか、私、記憶がある前に、何か悲しい記憶が残ってるの。すごく、切なくて、悲しくて…私、戻らないほうが、幸せなのかもしれない。」
「そうか…のう・・・？」
「そりゃ、工藤さんがたに、いろいろ迷惑をかけてしまうかもしれないけど、私は、そのほうが幸せだと思うの。」
蘭の言葉に博士は何も言えなかった。
「あ、ごめん博士。」

「いいんじゃ。やめても構わんぞ？」
「でも…」
「いいぞ。わしは、その日を待ってる。蘭君が決心した日をな…」
博士はそういうと、蘭を毛利探偵事務所まで送っていった。
そこには、みんなが蘭を待っていた。蘭が入っていくと、和葉、園子、青子が蘭に抱き着いてきた。
「園子さん…？和葉さん？青子さん？」
「ばかぁ…どこにいたのよぉ！！」
「ごめん…なさい…」
蘭はこんなに自分を待っていてくれた人がいるってことを知って泣いていた。
自分はすごく幸せだということが分かった。
「博士と一緒にいたの。」
「そっか…蘭、無断でどこか行っちゃダメじゃない…！あ、新一君たち…！！！」
そう、新一ひとりだけ、蘭を探しに行った。ほかのみんなは大気ということになったが、新一は、真っ暗の中を一生懸命探していた。
「私、行ってきます！」
蘭が突然言い出した。
「駄目よ、蘭さん！あなたは記憶喪失なのよ！？」
「でも、私が勝手なことをしたからこうなったんです！私が探しに行きます！」
蘭はそう言い残すと、走って外に向かった。
みんな止める暇さえなかった。
蘭は一生懸命新一を探す。自分に責任を感じながら。

「よぉねえちゃん…」

いきなり話しかけられた蘭は、ビクついて何も言えなかった。
「君一人？一緒に遊ばない？」
「ひ、一人ですけど…」
「なら一緒に遊ぼうぜ？」
「で、でも、人を探してるんです！」
「なら、俺と一緒に探そうぜ！？」
「わ、私一人で…」
「いいからいいから！」
蘭は男の人に、腕をつかまれ、動けない状態になっていた。
どうすることもできず、怖くて目をつぶっていた蘭。
その時だった。

「おい…蘭！！！」

どこからか、自分を呼ぶ声が聞こえてきた。

「ク、工藤さん…！？」

腕をつかまれた蘭は、声を出すだけで精いっぱいだった。
「おい、蘭、何して…」
新一は、男に気が付くと、怖い顔をして、
「あなた誰ですか？」
と聞いた。

「この子がだれか探してるんだってさ…！」
「誰だ、蘭。」
「ク、工藤さんです…！私をまだ探してるんじゃないかって…！」
「お、お前、一回帰ったのか？」
「は、はい…！」
蘭の答えにより、新一はほっとしたように、顔を赤くした。
「それより、なら、彼女、遊ぼうよ！」
「あ、でも…！」
「あん？」
男は、いきなり怖くなって、今にも蘭を殴ろうとしていた。
しかし、そばに新一がいる。
「おい蘭。家に帰るぞ？」
新一が蘭を引っ張っていく。蘭は体が動くままについていった。
つまり、男を置いて行ったということになる…
男はぽつんと一人になってしまい、どうすることもなかった。

家に帰ると、みんな蘭と新一を待っていたかのような顔をして、毛利探偵事務所はドンチャン騒ぎになった。

第七章（後書き）

今日はこれでおしまいです！
感想待っています！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2121z/

花開くとき

2011年12月11日19時53分発行